

## 令和6年度研究開発実施報告書（要約）

### 1 研究開発課題

不登校等児童生徒<sup>※1</sup>が主体的に社会的自立や学校復帰に向かうことができるようにするための段階的な学校生活への適応の支援の在り方に関する研究開発

※1 本研究では、不登校及び不登校傾向等の児童生徒を「不登校等児童生徒」と呼ぶこととする。

### 2 研究の概要

不登校支援の目標は、児童生徒が社会的に自立できるようにすることであり、そのためには、社会性の育成、生涯を通じた学びの基礎となる学力の育成が必要である。

本研究では、不登校等児童生徒が主体的に社会的自立や学校復帰に向かうよう、個別の指導計画の作成や同時双方向型授業配信を含む ICT 等を活用した指導による支援の在り方について、明らかにする。

なお、研究対象を不登校等児童生徒とし、小・中・高等学校の各段階に応じた具体的な支援について、以下のような内容で研究を進めていく。

- 「不登校等児童生徒に必要となる資質・能力」の明確化及びそれを踏まえた特別な教育課程の編成
- 児童生徒一人一人の状況等に即したルーブリックに基づく個別の指導計画の作成と同時双方向型授業配信を含む ICT 等も活用した児童生徒一人一人の状況に合わせた指導方法の開発
- 児童生徒の可能性を伸ばす学習状況の把握及び学習評価の工夫

### 3 研究の目的と仮説等

#### (1) 研究仮説

不登校等児童生徒一人一人が「不登校等児童生徒に必要となる資質・能力」を確かに身に付けることを通して、主体的に社会的自立や学校復帰へとつながっていくことができる。そのために、次のような手だてを講じる。

- ①ルーブリックに基づく個別の指導計画の作成
- ②児童生徒一人一人の状況に合わせた指導

なお、不登校等児童生徒への支援については、一人一人の不登校に至った要因や背景が複雑であるため、より個に応じた取組が求められることは言うまでもないが、本研究においては、研究内容等を一般化（このような状況の児童生徒には、このような方法でアプローチするなど）できるよう取り組んでいく。

#### (2) 教育課程の特例

○不登校等児童生徒に必要となる資質・能力の明確化と特別の教育課程の編成  
(小・中学校)

- ・登校状況や個々の状況を考慮した登校状況の分類と、学習の習熟状況を考慮した5段階の教育課程を作成する。
- ・児童生徒が主体的に社会的自立に向かうために必要な資質・能力を育むためのキャリア教育やソーシャルスキルトレーニング（以下、SST）等の学習活動を取り

入れた教科「キャリアデザイン科」を創設する。

### ○必要となる教育課程の特例（高等学校）

全日制普通科高等学校においては、現行では、病気療養、離島などの条件を除いて、対面により行う授業によって履修と習得の単位認定をしている。本研究では、校内教育支援教室<sup>※2</sup>の環境を整備し、不登校等生徒がICTを活用して配信される授業を校内教育支援教室に在中する教員と共に受講することで履修とみなし、単位認定につなげる機能を残しつつ、不登校等生徒に対する心のケアや転学を含めた学校復帰を促す校内教育支援教室の在り方を研究する。

※2 本市では、校内教育支援センターを「校内教育支援教室」と呼んでいる。

## 4 研究内容

### （1）教育課程の内容

#### 【福岡市立舞鶴小・中学校】

#### ① 不登校等児童生徒に必要な資質・能力

本研究では、「不登校等児童生徒に必要な資質・能力」を次のように設定した。

不登校等児童生徒が、主体的に社会的自立や学校復帰に向かうための資質・能力を次のとおり育成する。

- （1）社会的自立や学校復帰に向かうために、個の学習到達状況に応じた各教科の基礎的・基本的な知識及び技能を理解し、適切に使えるようにする。（知識及び技能）
- （2）社会生活におけるさまざまな課題に対して、課題を捉え、各教科や実生活で身に付けた知識及び技能を活用して、対処する思考力、判断力を養うとともに、課題解決のための表現力を高める。（思考力、判断力、表現力等）
- （3）集団や社会における生活や人間関係をよりよく形成しようとするとともに、自分のめざす姿を見いだし、その姿に近づこうとする態度を養う。（学びに向かう力、人間性等）

この資質・能力は、現行の学習指導要領と同じく、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で構成している。

「知識及び技能」については、不登校等児童生徒の実態である学習空白や学習への不安という課題の改善のため、学級への円滑な復帰も考慮し、各教科の基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けることとした。

「思考力、判断力、表現力等」については、対人関係を含む、社会生活における課題への対応を考慮し、SSTの教育課程への位置付けを念頭に、課題解決のための思考力、判断力、表現力を高めることとした。

「学びに向かう力、人間性等」については、将来に希望を抱き、学校復帰や社会的自立を目標に、自己実現や人間関係づくりに向かう態度を育てることとした。

#### ② 個別の教育課程の編成

個別の教育課程を編成するにあたり、「個別の指導計画の作成」と「不登校等児童生徒一人一人の状況に合わせた指導方法の開発」を行うこととした。そして、研究内容等を一般化できるように取り組んでいくことをめざした。

研究内容の一般化に向け

【表1 キャリアプレイス（CP）5分類】

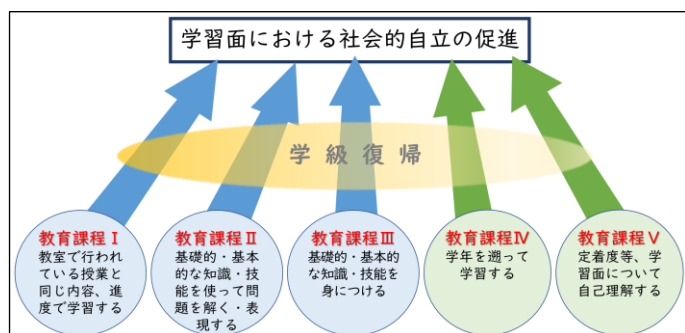
	CP1	CP2	CP3	CP4	CP5
登校日数	週5日登校	週3日以上登校	週1日以上登校	登校していない	
登校状況	○教師ステーション、ステップルーム等、主に学級の教室ではない別室で過ごす児童生徒 ○オンラインを使用した学習（オンライン授業・学習コンテンツの利用）をしていると認められる児童生徒			登校していないが、児童生徒との面談や家庭との連携が可能	登校せず、教員や関係機関職員等による児童生徒との面談が難しい
登校における目標	教室復帰を含めた、学級との関わりを増加を目指す。	教室復帰を含めた、学級との関わりを増加を目指す。	登校頻度や学校滞在時間の増加を目指す。	教員や関係機関職員等との、学校もしくは公民館等、自宅以外の場での面談を目指す。	教員や関係機関職員等との、電話やインターネット等を利用した会話や面談を目指す。
社会的自立に向けた目標	自らの進路を主体的に捉え、他者と適切に関わりながら自己実現を目指す。	自らの進路について考える。また、自らが必要な支援を他者に適切に求めることができるようになることを目指す。	自らの進路について考える。また、他者と対話したり、協働したりすることにより、自らが必要な支援に気付くことを目指す。	他者との対話により、現在の自分を見つめ、理想の自分の姿を思い描くことを目指す。	教員や関係機関職員等、家族以外の他者とのコミュニケーションを図ることを目指す。

不登校等児童生徒の登校状況によって分類し、登校における目標と社会的自立に向けた目標を設定した。登校状況については分類名を「キャリアプレイス（Career Place：CP）」とし、五つに分類した（表1）。

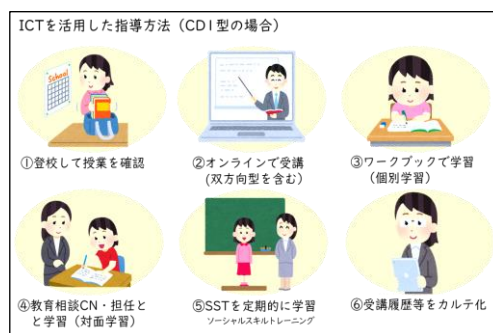
また、個の学びに応じた各教科の教育課程を作成した。不登校等児童生徒については、登校状況や不登校等の要因、学習内容の習熟の程度等から、学習が標準授業時数に満たないことが大いに考えられるため、教科書の単元配列に準拠した計画を用い、教育計画の重点化及び短縮化を図り、学習到達状況に応じた5段階からなる不登校等児童生徒用教育課程を作成した（図1）。

重点化では、各教科で重点単元を設定し、不登校等児童生徒の実態や学習の取組状況に合わせ、優先的に学習することとした。短縮化は、学校だけでなく、家庭等の学校外の場所でも個別で学習に取り組めるよう、指導方法（学習の流れ）を設定した。

福岡市では、教育委員会が小中全学年、全教科、全単元の動画教材を作成し、自由に閲覧できる。また、オンラインを活用し、学級の授業に別室や家庭から参加することが可能である。そこで、動画教材やオンライン授業を活用した指導方法を設定した（図2）。また、授業で使用しているワークブック、学習動画配信サービスやAIドリル等の教育支援ツール等を使用し、教科における「知識及び技能」の整理、定着を図り、学習を進めていくことにより、短縮化を図るように設定した。



【図1 不登校等児童生徒の教育課程の5段階のイメージ】



【図2 ICTを活用した指導方法（例）】

### ③ 教育課程の特例「キャリアデザイン科」の創設

不登校等児童生徒が、自分自身が主体となって自立的に、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねを意味する「キャリア」について考え、社会的自立のために必要な能力・態度を育むことをめざし、キャリアデザイン科を創設した。キャリアデザイン科の教育課程の実施については、標準時数（小45分、中50分）を設定せず、短時間で実施した。時数は週1回、年間35時間程度の実施を計画した。

本研究では、Vineland II 適応行動尺度（Sara S. Sparrow・Domenic V. Cicchetti・David A. Balla, 2014）のカテゴリーを参考に、校内教育支援教室において継続的に学習・実践することが可能な「コミュニケーション」、「社会性」の領域について社会的自立に必要な力（表2）を整理し、それらの力を高めることをめざしてキャリアデザイン科の学習を実施した。

【表2 キャリアデザイン科における社会的自立のために向上させたい力】

領域	社会的自立のために向上させたい力
コミュニケーション	話や指示を理解する力 話を聴く力・注意を向ける力 聞かれたことに答える力 適切な単語・表現を使う力 複雑な思考の入った会話をする力
社会性	その場に応じた行動をする力 他者と適切な距離を保つ力 他者を気遣う力 同世代の子と関わろうとする力 ルールを守った行動をとる力 マナーを守った行動をとる力 自分の非を認める力 約束を守ろうとする力 いやなこと、危険なことを回避する力 活動の気持ちの切りかえをする力 不快なできごとに振り回されずに気持ちを保つ力

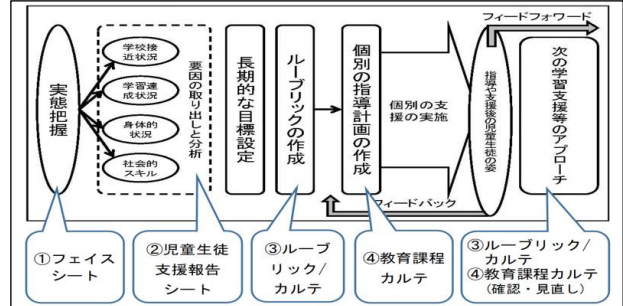
参考：Sara S. Sparrow, Domenic V. Cicchetti, David A. Balla (2014)  
「Vineland II 適応行動尺度」

#### ④ 児童生徒支援体制の構築

複数の教職員が関わり、多面的・多角的に児童生徒の実態を把握し、支援方針をチームで検討し、実施することにより、一人の子どもに対する支援の流れが見える体制を「対応を『見える化』する支援体制（図3）」と定義し、組織的に支援を検討、実施した。また、組織的に支援を検討、実施する流れと、その流れの各段階で使用する様式を作成した（図4）。



【図3 「見える化」した支援体制（イメージ）】



【図4 児童生徒支援のフローと支援の各段階で使用する様式】

#### 【福岡市立福岡西陵高等学校】

##### ① 編成した教育課程の特徴

- ・校内教育支援教室の環境を整備し、不登校、不登校傾向の生徒や病気等で長期欠席をする生徒が、ICTを活用して配信される課題や授業を受講することで履修とみなし、単位修得につなげる学習支援を行う。なお、不登校、不登校傾向の生徒については、教室復帰して本校を卒業する意思がある生徒を対象とし、校内教育支援教室に在駐する教員と共にオンライン授業を受講することを条件とする。また、病気等で長期欠席をする生徒のオンライン授業の受講場所については、生徒の状況に応じて柔軟に対応する。
- ・単位取得をめざした履修認定を希望する不登校等生徒に対して、校内教育支援教室での学習支援を行う。
- ・関係教職員間で学習支援方法を共有し、ICTを活用した学習状況の把握及び学習評価をする。
- ・校内教育支援教室の環境を整備し、学習が途切れることを防止したり対人関係を維持したりすることにより、不登校状態の深刻化を抑制し、全ての生徒に開かれた校内教育支援教室を運用する。

#### (2) 研究の経過

<p>第一年次</p>	<p>《小・中学校》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・不登校等児童生徒に必要となる資質・能力について、先行研究等をもとに要素の抽出を行い、その育成のために必要となる教育課程の枠組みについて検討する。</li> <li>・児童生徒一人一人の状況に応じたルーブリックを作成する。</li> <li>・小・中学校の各段階について個別の指導計画を作成し、同時双方向型授業配信を含むICT等も活用した場合の学習状況の把握及び学習評価について試行する。</li> </ul> <p>《高等学校》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・通信制高等学校や単位制高等学校の事例をもとに、全日制高等学校において、ICTやオンラインを用いた不登校生徒の学習支援、学習評価の在り方について調査する。</li> <li>・ICTやオンラインを用いた学習支援のための物的・人的環境の準備を行う。</li> </ul>
<p>第二年次</p>	<p>《小・中学校》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・不登校等児童生徒に必要となる資質・能力及び教育課程の在り方について小・中学校9年間の系統について具体化し、授業実践を行う。</li> <li>・教育課程におけるソーシャルスキルの位置付けや内容、方法について具体的な取組を通して明らかにしていく。</li> <li>・小・中学校の各段階について個別の指導計画を作成し、同時双方向型授業配信を含むICT等も活用した場合の学習状況の把握及び学習評価について実施する。</li> </ul>

	<p>《高等学校》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・不登校生徒の学習支援、学習評価の在り方の調査、研究をもとに、本校における具体的なシステムを策定する。</li> <li>・高等学校における校内教育支援教室の整備と運用の在り方について調査、研究する。</li> <li>・オンライン授業の対象を3年生の欠席時数が3分の1に近づいた生徒とし、単位認定の在り方について調査・研究を行う。また、不登校傾向の1、2年生の生徒への対応についても併せて検討する。</li> </ul>
第三年次	<p>《小・中学校》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・既存の各教科の年間指導計画を重点化・短縮化し、児童生徒の授業参加や学習の取組状況に合わせた5段階の教育課程を作成する。</li> <li>・5段階の教育課程の実施における児童生徒の変容から、本研究における教育課程の有効性について明らかにする。</li> <li>・小・中学校の各段階について個別の指導計画を作成し、同時双方向型授業配信を含むICT等も活用した場合の学習状況の把握及び学習評価の在り方を検討する。</li> </ul> <p>《高等学校》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒のニーズに沿って校内教育支援教室の環境を整備し、学習が途切れることを防止したり対人関係を維持したりすることにより、不登校状態の深刻化を抑制し、すべての生徒に開かれた校内教育支援教室運用を開始する。</li> <li>・単位取得をめざした履修認定を希望する不登校等生徒に対して、校内教育支援教室での学習支援や小グループでのソーシャルスキルトレーニングを試行する。</li> <li>・個別の指導計画を作成し、同時双方向型授業配信を含むICT等も活用した場合の学習状況の把握及び学習評価について試行する。</li> <li>・生徒のニーズに対応した全日制の普通科高等学校における校内教育支援教室の機能、環境整備の在り方等について明らかにする。</li> </ul>
第四年次	<p>《小・中学校》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・作成した新教科の年間指導計画に基づいて授業を実施し、その効果について明らかにする。</li> <li>・小学校から中学校までの変容についてデータを整理し、研究の効果について検証する。</li> <li>・不登校等児童生徒の学習支援・指導についてのガイドラインを作成する。</li> </ul> <p>《高等学校》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の変容についてデータを整理し、全日制の普通科高等学校における校内教育支援教室の機能、環境整備の在り方等について明らかにする。</li> <li>・単位取得をめざした履修認定を希望する不登校等生徒の有無についても調査を進め、希望する生徒があらわれた場合には、ICTを活用した学習状況の把握及び学習評価の在り方についての成果と課題をまとめる。</li> </ul>

### (3) 評価に関する取組

#### 【福岡市立舞鶴小・中学校】

本研究に関する評価を、表3のように計画し、実施した。

【表3 本研究の効果についての評価方法】

	評価方法	評価内容	対象	時期
① 資質・能力	Q-Uアンケート	不登校等児童生徒と教室で過ごしており、かつ、学級生活満足群に属している児童生徒のQ-Uアンケートの結果を比較し、不登校等児童生徒の傾向を探る。	全校児童生徒	小学校4、5、6年 ・中学校3年：5月末頃 中学校1、2年：5月末頃、10月末頃
	児童生徒の様相観察	本研究において設定した資質・能力について、児童生徒に身につけている力や力の向上の様子を評価する。	不登校等児童生徒	随時
	児童支援部・生徒支援委員会における児童生徒のアセスメント	児童生徒に関する情報を共有し、学習や生活、対人関係等の改善状況を評価する。	児童支援部・生徒支援委員会担当教員	小学校：児童支援部会（月1回） 中学校：生徒支援委員会（週1回）
② 個別の教育課程	児童生徒の学習進捗状況チェック	児童生徒の学習の進捗を、教科の教育課程チェックシートやカルテに記録し、学習状況等を評価する。	不登校等児童生徒、主な支援者	随時
	児童生徒と主な支援者による面談	児童生徒と面談し、学習状況について本人による自己評価、主な支援者による他者評価を行い、次月の学習予定を検討する。	不登校等児童生徒、主な支援者	毎月末

③ キャリア デザイン 科	Q-Uアンケート	児童生徒のQ-Uアンケートの友人関係や進路意識の項目の点数から変容を評価する。	不登校等児童生徒	小学校4, 5, 6年 ・中学校3年: 5月 末頃 中学校1, 2年: 5 月末頃, 10月末頃
	児童生徒の様相観察や感想からのアセスメント	児童生徒の活動時の他者との関わり方や言動、活動後の感想等から、その時の児童生徒のキャリア面の様子を把握する。	不登校等児童生徒	活動実施時、活動実施後
	小・中学生用ソーシャルスキル尺度(上野・岡田, 2006)を使用した質問紙調査	不登校等児童生徒の周りの人との関わりの様子について、主な支援者による他者評価を行い、変容を評価する。	主な支援者	各学期末
④ 児童 生徒 支援 体制 の 構築	支援体制に関する質問紙調査	児童支援部会・生徒支援委員会、教育相談コーディネーター、校内教育支援教室について、一教員としての有用感や効果を評価する。	小・中学校全教職員	令和6年8月 (研究最終年度)
		児童支援部会・生徒支援委員会、教育相談コーディネーター、校内教育支援教室について、担当としての有用感や効果を評価する。	児童支援部・生徒支援委員会担当教員	令和6年8月 (研究最終年度)

### 【福岡市立福岡西陵高等学校】

- 運営指導委員会による評価
  - ・4年間の研究の総括
  - ・高等学校におけるICT等を活用した不登校支援の在り方
- 具体的な取組に関する評価
  - ・学習前後に生徒アンケートや保護者へのヒアリングなどによる感想や意見による評価
  - ・ポートフォリオによる学習状況の変容についての評価
- 報告会における外部教員や研究者等による評価

## 5 研究開発の成果

### (1) 実施による効果

#### 【福岡市立舞鶴小・中学校】

#### ① 児童生徒への効果

##### ア 不登校等児童生徒に必要な資質・能力

本校の不登校等児童生徒の傾向として、学習面については以前の不登校時期の学習空白の大きさからくる学習への不安や学習意欲の低さ、生活面については生活リズムの不規則さ、社会面については他者と関わる機会や経験の少なさによる人間関係の構築の難しさ、キャリア面については自分の将来に希望をもつことの難しさがあった。資質・能力を設定し、支援者である教職員が指導や支援を実施することにより、児童生徒の資質・能力を高めるための一助となった。

##### イ 個別の教育課程の編成

＜小学校＞校内教育支援教室を利用している児童の学習は、発達段階や状況、また、児童によっては教科ごとに、教室で授業を受ける、自分の興味・関心のある学習に取り組む、教室の学習内容と同じ内容の学習をすると、教育相談コーディネーターと学級担任が確認の上、柔軟に対応して進めた。その結果、複数の児童が、自分が取り組める教科について、学習する内容や方法を自ら選択し、主体的に学習に取り組んだ。これは、自分の状況に適した教育課程を知り、見通しをもつことができたためであると考えられる。

＜中学校＞不登校等生徒の教育課程の作成・実施により、66.6% (12名中8名) の

生徒が、自分が取り組むことができる教科について、学習する内容や方法を自ら選択し、主体的に学習に取り組んだ。教科の教育課程は、生徒が自身の習熟状況を客観的に把握し、自分の状況に適した教育課程の段階、学習内容の検討や、見直しをもった学習をするために有効であったと考えられる。生徒の学習の進捗を主な支援者が記録し、月末の生徒との面談時に「今月できたこと、次月にできそうなこと」とポジティブな面について確認をすると、多くの生徒について学習が進み、取り組む教科が増加した。また、校内教育支援教室で過ごしていた生徒の複数において、一部の教科の授業を教室で参加できるようになり、少しずつ教室で参加できる教科が増え、教室復帰が叶った。

## ウ 教育課程の特例「キャリアデザイン科」の創設

＜小学校＞キャリアデザイン科の学習活動の中で、児童が周りの人のことを考え、ルールを守って活動に参加しようとする態度が見られた。児童の活動の様子や変容から、普段は個別で学習することの多い児童同士が、活動の中で周りの児童と関わり、コミュニケーションを図る楽しさを味わうことができたと考えられる。

＜中学校＞キャリアデザイン科の学習活動を通して、84.6%（13名中11名）について周りの人との関わりが徐々に増えていく様子が見られた。校内教育支援教室での少人数集団での生活や活動の中に、周りの人の考えを聞く、自分について考える、意思決定をする、伝えるという場面をつくることにより、教室に居づらさを感じる、登校が難しいという生徒の自己理解や他者意識が醸成されたと考えられる。

## エ 児童生徒支援体制の構築

＜小学校＞児童支援部会を設置し、検討した支援を実施することにより、複数の児童に、登校日数の増加、学級や学年での活動への参加、不登校状況の改善等が見られた。担任だけでなく、複数の職員が児童の状況を把握し、多面的に児童を見取り、支援について検討したことが、児童の状況改善につながったと考えられる。

＜中学校＞生徒支援委員会を設置し、個々に対して検討した支援を組織的に実施すると、生徒の登校日数だけでなく、教室での関わりも増加した。これは、生徒支援委員会で複数の教職員が生徒の不登校等の背景や要因、困り、強みをアセスメントし、

適時適切な支援の手だてを実施したこと、生徒を支援する教職員の関わりが増加したことによると考えられる。研究以前に比べ、不登校状況が改善されたケースや校内教育支援教室に登校し、年度内に教室復帰することができたケースが増加した（表4）。

【表4 生徒の支援開始時後6か月間のキャリアブレイスの推移と登校状況】

	支援開始	1ヶ月	2ヶ月	3ヶ月	4ヶ月	5ヶ月	6ヶ月	登校状況
生徒A	3	3	3	3	3	3	3	SR
生徒B	3	3	3	3	3	3	4	SR
生徒C	4	3	3	2	2	3	2	SR
生徒D	3	3	3	3	3	4	3	SR(FS利用)
生徒E	4	3	3	2	3	2	2	SR(一部教室)
生徒F	4	3	3	3	2	2	2	SR(一部教室)
生徒G	3	3	2	2	2	3	1	教室(一部SR)
生徒H	4	3	2	2	1	1	1	教室(一部SR)
生徒I	4	3	3	3	2	2	2	教室(一部SR)
生徒J	4	4	3	2	2	2	1	教室復帰

※数字はキャリアブレイス（CP）の分類を示しており、週あたりの出席日数が1日程度をCP3、3日程度をCP2、ほぼ毎日登校できる状況をCP1としている。CP4は登校しないが会える状況、会えなくても電話等で会話ができる状況である。

※倫理的配慮として、生徒A～Jは年度、学年、利用開始日をランダムにし、記号を付している。

## ② 教師への効果

### ア 不登校等生徒に必要な資質・能力

不登校等児童生徒に必要な資質・能力を設定したことにより、児童生徒一人一人

について強みとなっている力や向上させたい力を把握し、強みを生かし、力を向上させることを意識して、支援の手だてを検討・実施することができた。また、児童生徒にどのような力が向上したか等成長を見取り、次の段階に移行する等、児童生徒個々に適切な支援を検討、実施することができるようになった。

### イ 個別の教育課程の編成

個別の教育課程を編成したことにより、一人の児童生徒につき各教科の習熟や学習空白の程度を把握し、学年を遡る、基礎的・基本的な内容に絞る、教室の授業と同じ進度で学習する等、生徒の実態に応じて学習内容や学習方法を提案することができた。その結果、複数名の児童生徒が、教科によっては教室で授業を受けることができるようになった。

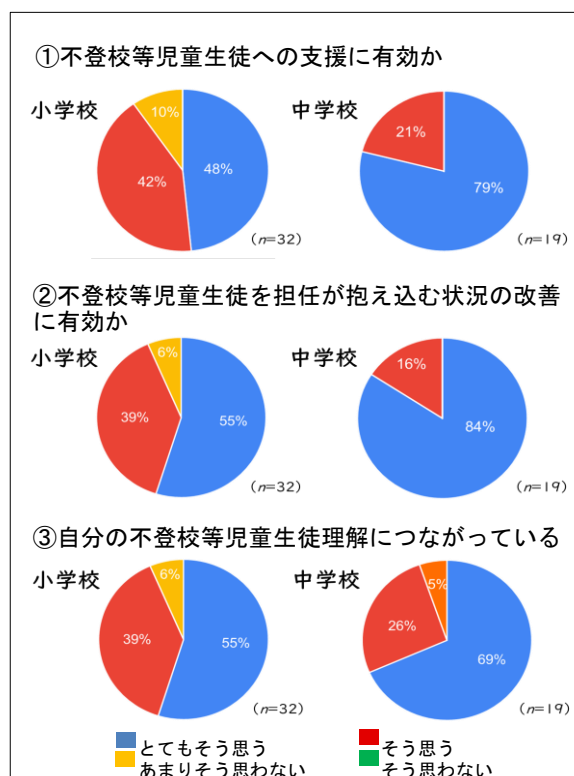
### ウ 教育課程の特例「キャリアデザイン科」の創設

＜小学校＞ソーシャルスキルの向上やキャリア発達のための学習活動に必要性を感じながらも取り組む内容や方法を見いだすことができていなかったが、キャリアデザイン科を編成したことにより、活動の目的と根拠が明確になった。指導者が、キャリアデザイン科の学習活動の中で児童が他者と関わる様子を観察し、見取った課題から支援の手だてを検討し、支援に生かすことができた。

＜中学校＞以前は、校内教育支援教室で SST を実施する際、生徒の実態に合わせて内容を選ぶことが難しかった。キャリアデザイン科として、生徒のキャリア発達や社会性の向上という目的をもって実施し、実施中に生徒の様子を観察し、実施後に活動を振り返り、生徒のその時の様子や長期にわたる変容を見取ることができるようになった。

### エ 児童生徒支援体制の構築

児童支援部・生徒支援委員会を設置したことにより、児童生徒の不登校傾向の背景や要因を複数の教職員によって多面的・多角的に把握し、児童生徒個々に対する適時適切な支援を検討・実施することができた。児童支援部・生徒支援委員会を中心とした支援体制に関する教職員への質問紙調査（図5）では、「①児童支援部・生徒支援委員会が不登校等児童生徒への支援に有効であるか」という問いに、中学校では全ての教職員が肯定的な回答であった。一方、小学校では10%の教職員が「あまりそう思わない」と回答した。教職員への聞き取りから、小学校の児童支援部会は月1回、中学校の生徒支援委員会は週1回設けており、小学校は中学校に比べると、他の学級の児童の様子を把握することが難しく、児童支援部会が適時の支援に結び付きづらい現状があると考えられる。「②児童支援部・生徒支援委員会が不登校等児童生徒を担当が抱え込む状況の改善に有効か」という問いについても、中学校は全ての教職員が肯定的な回答であった。一方、小



【図5 児童支援部・生徒支援委員会に関する質問紙調査の結果】



学校では6%の教職員が「あまりそう思わない」と回答した。自分が担任している学級や関わっている児童を対象となる児童がいない場合、担任が抱え込む状況の改善を感じる機会が少ないことや、即時、適時の支援へのつながりにくさが少なからずあると推察される。「③児童支援部・生徒支援委員会があることが自分の不登校等児童生徒理解につながっているか」という問いには、小学校、中学校ともに約95%の教職員が肯定的な回答であり、約5%が「あまりそう思わない」と回答した。学級や関わっている児童生徒の中に不登校等の児童生徒がいない教職員についても、児童生徒のアセスメントの方法や、どのような児童生徒にどのような支援を実施しているか等、児童生徒支援について広く周知する必要がある。

### ③ 保護者への効果

保護者と関わる場面は、主に、電話連絡、家庭訪問、面談である。以前はそれらのほとんどを担当が担っていた。児童生徒支援体制を構築し、組織的に支援を実施することにより、担任だけでなく、学年職員、教育相談コーディネーターや特別支援教育コーディネーター、SCやSSWと、関係職員が連携して保護者に関わることができるようになった。保護者からは「相談できる先生が複数いて心強い」、「学級に参加できなくてもステップルームで自分の子どもに合った過ごし方を提案してもらえて安心した」、「今まで自分一人で子どものことを抱えてきたが、校内教育支援教室で他の保護者とつながることができて嬉しい」という声が聞かれた。

#### 【福岡市立福岡西陵高等学校】

##### ① 生徒への効果

これまでに3名の生徒が校内教育支援教室を利用している。1名は単位を修得して卒業し、1名が進級時に完全教室復帰を果たしており、不登校傾向にあり教室復帰をめざした生徒に対して一定の効果が確認できている。なお、結果として休学した1名についても、休学前には教室以外での学校の居場所として機能を果たしており、こちらについても一定の効果が確認できている。

##### ② 教師への効果

校内教育支援教室の環境と機能を周知することで、不登校生徒、及び不登校傾向にある生徒に対する支援の幅が広がってきている。また、ケース会議を定期的実施することで、担任、教科担当教員、教育相談担当教員、及びSCやSSWとの連携が一層密になり、学習支援方法を共有するなどして学習支援の在り方についてもブラッシュアップがなされている。その結果、該当生徒の学習状況についても的確に把握できるようになり学習評価に反映することができた。さらに、校内教育支援教室を活用した学習支援のノウハウを活かし、病気等により長期欠席した生徒に対しても単位修得につながる学習支援を行うことができるようになった。

##### ③ 保護者等への効果

校内教育支援教室を利用した生徒の保護者については、学習状況を細目に連絡することで、不安も軽減している。さらに、病気等で長期欠席をする生徒の保護者からは、ICTを活用して単位修得につながる学習支援がなされることに対して大変好評の声をいただいている。

## (2) 実施上の問題点と今後の課題

#### 【福岡市立舞鶴小・中学校】

##### ○ 個別の教育課程の編成

本研究では、教育委員会の各教科の指導主事による指導の下、教育課程を編成し

た。この教育課程を活用するためには、教育相談コーディネーターと担任、教科担任の連携が不可欠であった。今後、児童生徒個別に教育課程を編成し、学習支援・指導を行うためには、児童生徒個々に適した学習方法や学習機会の提案、提供、不登校等児童生徒への学習の評価等について、学校として教職員が共通理解したうえで実施が必要である。また、教科によっては、教室ではない場での学習やその評価について、できること、できないことを児童生徒や保護者と確認をすることも大切であると考え。

### ○ 教育課程の特例「キャリアデザイン科」の創設

本研究では「キャリアデザイン科」を創設し、その教育課程を作成した。実施については、小学校は帯タイム、中学校は総合的な学習の時間に設定していたが、その時の子どものコンディションや、教室の授業への参加等により、設定した時間に児童生徒が揃わないという状況がほとんどであった。学びの多様化学校や教育支援センター等ではない、公立の小中学校の校内教育支援教室でどのような時間に設定することが適切であるか、今後も検討が必要である。

### ○ 児童生徒支援体制の構築

本校は施設一体型小中連携校である。そのため、小学校の教職員が中学生の小学生時代のことを知っていたり、兄弟姉妹関係の情報を共有しやすかったりと、小中学校の連携が取りやすい。本市は、ほとんどの中学校では複数の小学校から生徒が進学してくるため、本研究を一般化させるためには、中学校ブロックで小中学校の児童支援担当教員、中学校教育相談コーディネーターの連携や、小中学校の9年間を見通した児童生徒支援体制を構築することが必要であると考え。

#### 【福岡市立福岡西陵高等学校】

### ○ 校内教育支援教室の環境に関する課題

校内教育支援教室の整備については、現状「Wi-Fi環境、エアコン、連絡用の内線電話、ソファ、テーブル、パーテーション他生徒がリラックスできるマット等」を整備し、全ての教室からオンライン授業を配信できる環境を整備している。しかしながら、進路指導に関する資料やSSTに関する教材の整備は不十分などところがあるため、生徒の多様なニーズに応えるためにも充実させる必要がある。

### ○ 校内教育支援教室の運営に関する課題

校内教育支援教室の運営に当たっては、生徒の状況に合わせたオンライン授業計画からケース会議の実施まで、担当者が柔軟なコーディネートを行う必要がある。さらに、そのノウハウは病気等で長期欠席する生徒に対する学習支援にも生かされている。不登校等生徒や病気等による様々な理由により長期に欠席する生徒のように多様な学習支援を必要とする生徒が今後ますます増えていくことが予想されることから、単位修得につながる、言い換えれば学力を保证する効果的な学習支援を持続的に行うために専属の担当教員を配置することは必須であると考え。

## 引用・参考文献

Sara S. Sparrow・Domenic V. Cicchetti・David A. Balla (2005) . Vineland-II 適応行動尺度 (辻井正次・村上隆 日本語版監修・黒田美保・伊藤大幸・萩原拓・染木史緒 日本語版 作成 (2014) : 日本版 Vineland-II 適応行動尺度マニュアル 日本文化科学社)

清水裕士(2023). 統計分析ソフト HAD18.0 <https://norimune.net/had> (2024.12.6 閲覧)

## 福岡市立舞鶴中学校 教育課程表 (令和 6 年度)

	各教科の授業時数									特別の教科である道徳	総合的な学習の時間	特別活動	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術・家庭	外国語				
第1学年	140	105	140	105	45	45	105	70	140	35	50	35	1015
第2学年	140	105	105	140	35	35	105	70	140	35	70	35	1015
第3学年	105	140	140	140	35	35	105	35	140	35	70	35	1015
計	385	350	385	385	115	115	315	175	420	105	190	105	3045

## 福岡市立舞鶴小学校 教育課程表 (令和 6 年度)

	各教科の授業時数										特別の教科である道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語					
第1学年	306	/	136	/	102	68	68	/	102	/	34	/	/	34	850
第2学年	315	/	175	/	105	70	70	/	105	/	35	/	/	35	910
第3学年	245	70	175	90	/	60	60	/	105	/	35	35	70	35	980
第4学年	245	90	175	105	/	60	60	/	105	/	35	35	70	35	1015
第5学年	175	100	175	105	/	50	50	60	90	70	35	/	70	35	1015
第6学年	175	105	175	105	/	50	50	55	90	70	35	/	70	35	1015
計	1461	365	1011	405	207	358	358	115	597	140	209	70	280	209	5785

令和4年度（第47期）入学生 教育課程表

令和4年9月14日

福岡市立福岡西陵高等学校

学年 類型	1年	2年					3年					単位数計				
		共通	理数重視系	文科・探究重視系		理数重視系	文科・探究重視系			理数重視系	文科・探究重視系		理数重視系	文科・探究重視系		
				標準型	探究型		5教科型	3教科型	5教科型		3教科型	探究型		5教科型	3教科型	5教科型
科目(標準単位)	想定されるクラス数	8	3	4	1	1	2	1	3	1	2	2	2	2	2	
各 学 科 に 関 する 各 目 的	現代の国語	2	2									2	2	2	2	
	言語文化	2	3									3	3	3	3	
	論理国語	4		2	2		2		2	2	2	4	4	4	4	
	文学国語	4			1	1			2	2	2	0	0	3	3	
	国語表現	4										0	0	0	0	
	古典探究	4		2	3	3			3	3	3	2	2	6	6	
	※総合国語	4								4		0	0	0	4	
	※古典探究演習	2					◇2					0~2	0	0	0	
	地理総合	2	2									2	2	2	2	
	地理探究	3		2	4	4		3				5	5	0~4	0~4	
※地理探究特講	3							3	3	3	0	0	0~3	0~3		
歴史総合	2	2									2	2	2	2		
日本史探究	3			4	4						0	0	0~4	0~4		
※日本史探究特講	3							3	3	3	0	0	0~3	0~3		
世界史探究	3			4	4						0	0	0~4	0~4		
※世界史探究特講	3							3	3	3	0	0	0~3	0~3		
※地理探究演習	4								◎4	◎4	0	0	0	0~4		
※日本史探究演習	4								◎4	◎4	0	0	0	0~4		
※世界史探究演習	4								◎4	◎4	0	0	0	0~4		
公民	2		2	2	2						2	2	2	2		
倫理	2										0	0	0	0		
政治経済	2							3	◎4	◎4	0	0	3	0~4		
各 学 科 に 関 する 各 目 的	数学Ⅰ	3	3									3	3	3	3	
	数学Ⅱ	4		4	4							4	4	4	0	
	数学Ⅲ	3					○4					0~4	0~4	0	0	
	数学A	2	2									2	2	2	2	
	数学B	2		2	2							2	2	2	0~2	
	数学C	2					△3		▽3			0~3	0~3	0~3	0	
	※数学基礎演習	2~3					△3		▽3			0~3	0~3	0~3	0	
	※数学総合演習	2~4					○4		2			0~4	0~4	2	0	
科学と人間生活	2										2	2	2	2		
物理基礎	2	2									2	2	2	2		
物理	4		●2			●4					0~6	0~6	0	0		
化学基礎	2		*2	2	2						2	2	2	2		
化学	4		*2			☆4	☆2				4~6	4~6	0	0		
生物基礎	2	2									2	2	2	2		
生物	4		●2			●4					0~6	0~6	0	0		
地学基礎	2										0	0	0	0		
地学	4										0	0	0	0		
※化学基礎演習	2							2			0	0	2	0		
※生物基礎演習	2						☆2	2			0~2	0~2	2	0		
保健体育	7~8	3	2	2	2	2	2	2	3	3	7	7	7	8		
保健	2	1	1	1	1						2	2	2	2		
音楽Ⅰ	2										0~2	0~2	0~2	0~2		
音楽Ⅱ	2								◇2	◇2	0~2	0~2	0~2	0~2		
音楽Ⅲ	2										0	0	0	0		
美術Ⅰ	2	2									0~2	0~2	0~2	0~2		
美術Ⅱ	2								◇2	◇2	0~2	0~2	0~2	0~2		
美術Ⅲ	2										0	0	0	0		
書道Ⅰ	2	2									0~2	0~2	0~2	0~2		
書道Ⅱ	2								◇2	◇2	0~2	0~2	0~2	0~2		
書道Ⅲ	2										0	0	0	0		
英語コミュニケーションⅠ	3	3									3	3	3	3		
英語コミュニケーションⅡ	4		4	4	4						4	4	4	4		
英語コミュニケーションⅢ	4					4	4	4	4	4	4	4	4	4		
論理・表現Ⅰ	2	2									2	2	2	2		
論理・表現Ⅱ	2		2	2	2						2	2	2	2		
論理・表現Ⅲ	2					2	2	3	3	3	2	2	2	3		
※英語演習	2						◇2				0	2	0	0		
※英語探究	2							◇2	◇2		0	0	0	0~2		
家庭基礎	2	2									2	2	2	2		
家庭総合	4										0	0	0	0		
情報Ⅰ	2		2	2	2						2	2	2	2		
情報Ⅱ	2										2	2	2	2		
※情報演習	1					1	1	1	1	1	1	1	1	1		
総合的な探究の時間	3~13	1	1	1	7	1	1	1	5	3	3	3	3	3~9		
特別活動	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	3	3	3	3		
ホームルーム活動																
合計		33	33	33	33	33	33	33	33	99	99	99	99	99		
学校裁量時間		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		

※科目名は学校設定科目

(補足) 3年の選択は同じ記号ごとに選択。

(補足\*) 2年次理数重視系の「化学基礎」「化学」は前後期履修。前期「化学基礎」を履修し、後期「化学」を履修していく。

(補足☆) 3年次理数生物選択者については化学の履修内容により化学2単位/化学4単位を選択。化学2単位選択の場合は生物基礎演習を履修すること。

令和5・6年度入学生 教育課程表

福岡市立福岡西陵高等学校

学年	科目	科目(標準単位)	学年	単位数計															
				1年	2年				3年			単位数計							
					共通	理数重視系	文科・探究重視系		理数重視系	文科・探究重視系		理数重視系	文科・探究重視系						
標準型	探究型	5・6教科型	3教科型	5・6教科型	3教科型	探究型	5・6教科型	3教科型	5・6教科型	3教科型	探究型								
		想定されるクラス数		8	3	4	1	1	2	1	3	1	2	2	2	2	2		
各 学 科	国 語	現代の国語	2	2										2	2	2	2		
		言語文化	2	3										3	3	3	3		
		論理国語	4		2	2	2		2	2	2	2		4	4	4	4		
		文学国語	4			1	1							0	0	3	3		
		国語表現	4											0	0	0	0		
		古典探究	4		2	3	3			3	3	3		2	2	6	6		
		※総合国語	4								4			0	0	0	4		
		※古典探究演習	2						◇2					2	0	0	0		
		地 理 史	地 理 史	地理総合	2	2										2	2	2	2
				地理探究特講	3		2	4	4							2	2	0~4	0~4
※地理探究特講	3									3	3	3		0	0	0~3	0~3		
歴史総合	2			2										2	2	2	2		
日本史探究	3					4	4							0	0	0~4	0~4		
※日本史探究特講	3									3	3	3		0	0	0~3	0~3		
世界史探究	3					4	4							0	0	0~4	0~4		
※世界史探究特講	3									3	3	3		0	0	0~3	0~3		
※地理探究演習	4										◎4	◎4		0	0	0	0~4		
※日本史探究演習	4										◎4	◎4		0	0	0	0~4		
公 民	公 民	公民	2		2	2								2	2	2	2		
		倫理	2											0	0	0	0		
		政治経済	2							3	◎4	◎4		0	0	3	0~4		
		数 学	数 学	数学Ⅰ	3	3										3	3	3	3
				数学Ⅱ	4		4	4								4	4	4	4
				数学Ⅲ	3						○4					0~4	0~4	0	0
				数学A	2	2										2	2	2	2
				数学B	2		2	2								2	2	2	0~2
				数学C	2						△3	▽3				0~3	0~3	0~3	0
				※数学基礎演習	2~3						△3	▽3				0~3	0~3	0~3	0
※数学総合演習	2~4								○4	2				0~4	0~4	2	0		
理 科	理 科	科学と人間生活	2											2	2	2	2		
		物理基礎	2	2										2	2	2	2		
		物理	4		●2				●4					0~6	0~6	0	0		
		化学基礎	2		*2	2	2							2	2	2	2		
		化学	4		*2				☆4	☆2				4~6	4~6	0	0		
		生物基礎	2	2										2	2	2	2		
		生物	4		●2				●4					0~6	0~6	0	0		
		地学基礎	2											0	0	0	0		
		地学	4											0	0	0	0		
		※化学基礎演習	2							2				0	0	2	0		
保 健 体 育	保 健 体 育	保健体育	7~8	3	2	2	2	2	2	3	3	3	7	7	7	8	8		
		音楽Ⅰ	2	2										0~2	0~2	0~2	0~2		
		音楽Ⅱ	2								◇2	◇2		0~2	0~2	0~2	0~2		
		音楽Ⅲ	2											0	0	0	0		
		美術Ⅰ	2	2										0~2	0~2	0~2	0~2		
		美術Ⅱ	2								◇2	◇2		0~2	0~2	0~2	0~2		
		美術Ⅲ	2											0	0	0	0		
		書道Ⅰ	2	2										0~2	0~2	0~2	0~2		
		書道Ⅱ	2								◇2	◇2		0~2	0~2	0~2	0~2		
		書道Ⅲ	2											0	0	0	0		
外 国 語	外 国 語	英語コミュニケーションⅠ	3	3										3	3	3	3		
		英語コミュニケーションⅡ	4		4	4	4							4	4	4	4		
		英語コミュニケーションⅢ	4						4	4	4	4		4	4	4	4		
		論理・表現Ⅰ	2	2										2	2	2	2		
		論理・表現Ⅱ	2		2	2	2							2	2	2	2		
		論理・表現Ⅲ	2						2	2	3	3		2	2	2	3		
		※英語演習	2						◇2					0	2	0	0		
		※英語探究	2							◇2	◇2			0	0	0	0~2		
		家 庭 情 報	家 庭 情 報	家庭基礎	2	2										2	2	2	2
				家庭総合	4											0	0	0	0
情報Ⅰ	2				2	2	2							2	2	2	2		
情報Ⅱ	2													2	2	2	2		
※情報演習	1						1	1	1	1		1	1	1	1				
特 別 活 動	特 別 活 動	総合的な探究の時間	3~13	1	1	1	7	1	1	1	5	3	3	3	3~9	13			
		ホームルーム活動	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	3	3	3			
合 計				33	33	33	33	33	33	33	33	99	99	99	99	99			
学校裁量時間				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			

※科目名は学校設定科目

(補足) 3年の選択は同じ記号ごとに選択。

(補足\*) 2年次理数重視系の「化学基礎」「化学」は前後期履修。前期「化学基礎」を履修し、後期「化学」を履修していく。

(補足☆) 3年理系生物選択者については化学の履修内容により化学2単位/化学4単位を選択。化学2単位選択の場合は生物基礎演習を履修すること。

## 学校等の概要

### 1 学校名、校長名

福岡市立舞鶴中学校（フクオカシリツマイルチュウガッコウ）  
校長 野坂 和幸（ノサカ カズユキ）

### 2 所在地、電話番号、FAX番号

福岡県福岡市中央区舞鶴2丁目6-1  
電話番号：092-741-4985  
FAX：092-741-4986

### 3 学年別生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		特別支援学級		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
116	4	100	3	115	4	6	1	331	12

### 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1※1		1	1	1	21		1			5
NS	スクール カウンセラー	事務職員	スクールソ シヤルワーカー	計						
1	1※2	2	1※3	36						

※1 校長は小中兼任

※2 スクールカウンセラーは、常勤ではないが舞鶴小・中学校で1名配置

※3 スクールソーシャルワーカーについても、常勤ではないが舞鶴小・中学校で1名配置

### 5 研究歴

- 平成29年度 キャリア教育推進連携表彰 奨励賞（文部科学省・経済産業省）
- 平成2～4年 福岡市ICT教育推進校

## 学校等の概要

### 1 学校名、校長名

福岡市立舞鶴小学校（フクオカシリツマイルショウガッコウ）  
校長 野坂 和幸（ノサカ カズユキ）

### 2 所在地、電話番号、FAX番号

福岡県福岡市中央区舞鶴2丁目6-1  
電話番号：092-741-6322  
F A X：092-741-4039

### 3 学年別児童数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		特別支援学級		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
134	4	150	5	147	5	147	5	142	5	138	4	37	5	895	33

### 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1※1		2	2	2	35		2	0	1	7
NS	スクール カウンセラー	事務職員	スクール ソーシャル ワーカー	計						
1	1※2	2	1※3	57						

※1 校長は小中兼任

※2 スクールカウンセラーは、常勤ではないが舞鶴小・中学校で1名配置

※3 スクールソーシャルワーカーについても、常勤ではないが舞鶴小・中学校で1名配置

### 5 研究歴

- 平成29年度 キャリア教育推進連携表彰 奨励賞（文部科学省・経済産業省）
- 平成2～4年 福岡市ICT教育推進校



## 学校等の概要

### 1 学校名、校長名

福岡市立福岡西陵高等学校

(フクオカシリツフクオカセイリョウコウトウガッコウ)

校長 得能 美和 (トクノウ ミワ)

### 2 所在地、電話番号、FAX番号

福岡県福岡市西区大字拾六町字広石

電話番号：092-881-8175

F A X：092-882-8079

### 3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	普通科	320	8	312	8	308	8			940	24

### 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	0	2	0	2	53	0	1	1	0	5
ALT	スクール カウンセラー	スクールソーシャ ルワーカー	事務職員	司書	計					
2	1※1	1※2	8	1※3	78					

※1 スクールカウンセラーは、常勤ではないが1名配置

※2 スクールソーシャルワーカーは、常勤ではないが1名配置

※3 学校司書は、常勤ではないが1名配置

### 5 研究歴

○平成30年度～令和4年度

「戦略的イノベーション創造プログラム (SIP)」によって採択された「エビデンスに基づくテラーメイド教育の研究開発」事業における実証研究対象校